

Balāvatāra 211111

南 清 隆

近年漸く研究が活発になってきたと感じられる *Atthakathā* 以降のパーリ文献を
読解する際、要求される知識の一つとして伝統的な文法学がある。西欧で集大成され
た合理的な比較文法に基づいた語学分析に対して、ともすれば散漫な印象を与える
descriptive な土着文法は、これまで研究史の上であまり脚光を浴びたこともなかつ
た。確かに、それらの中には語義分析にしても曲用にしても批判的な立場からは明ら
かな誤謬も多く存在する。しかし、パーリ語は頭末な相違はあっても単一部派が伝持
した聖典の用語である。実際にパーリ語を用い、伝え、解釈した人々らの実用的な見
地からの多くの示唆に富んだ見解も無視できないし、文献自身の資料的価値からもこ
れらの諸文献類は決して等閑視しておいてはならないと考える。そこで、筆者は現在
いくつかの文法書類を資料として、若干の考察を進めているが、小稿ではこれらの諸
文献の入門書と評される *Balāvatāra* (= *Balav*) を紹介しておきたい。

Balav はその書名の通り、初学者 (*Bala*) を (より高度な段階へ) 渡すもの (*avatāra*)
として、特にスリランカの仏教教団では僧侶がパーリ語を学習する際、まず第一に要
求される知識である文法と単語の前者の面で、最初に教授される基礎的書物である。
(ちなみに、後者の面では *Abhidhanappadīpikā* が代表されることは言う迄もな
い。) 著者は一四世紀 (一説には一二世紀) に存したスリランカの碩学 *Dhammakitti*
(*Saddhammakitti*) と伝えられ、概ね *Kaccāyana* (*-ppakaraṇa*) とその学派の諸書
に範を求め簡便に纏められている。全体の構成は類書に準じ、次の八章に区分され
る。

- 一、*Saṇṇā* (字音の説明と正字法)
 - 二、*Saṇḍhi* (連声法。形式から四種に分類)
 - 三、*Nama* (名詞類。曲用は六種に大分類)
 - 四、*Samāsa* (複合語。Digu を *Kammadhāraya* に収め五種)
 - 五、*Taddhita* (派生語類。三種に大別、更に *Samañña-taddhita* を四種に分類)
 - 六、*Akṣhyāta* (動詞。八種に類別)
 - 七、*Kitaka* (第一次派生語類)
 - 八、*Kāraṇa* (名詞類の格支配。六種)
- それぞれの章の様々な文法事項は、まず記憶暗誦用のスートラ (規則、*sutta*) と、

インターネット公開許諾のない文章には墨塗り処理を施しています。

それに対する解説 (vutti) 、そして具体的な用例 (payoga) の三部分を一纏めとして解説されてゆく。スートラ数は、現在流通している多くの版本に相違が見られ一定した数え方は確立していない。そのような混乱の主な原因は、Kaccyāna 系の各文法書に共通しているスートラを用いる際、それらが Balaṃ でもスートラとして挙げられているものなのか、或いは、vutti での解説を明確にするために典拠として引かれているものなのかを明らかに区分できない場合がしばしば見られるからである。そして、私見による限りは、スリランカの諸版本は殆んどの場合、これらをスートラとして数えるのに対して、インド版等では別のものと見て Balaṃ のスートラとは扱っていない方が多い。数が定まっていないのは我々にとっては不便ではあっても、実際の学習者はスートラを総て暗記していた訳であるから、そのスートラが何章の何番目に当たるか等という面はあまり頓着する必要がなかったのかも知れない。従って、確定的なスートラ数は現在準備中の校訂版発表の後に明らかにしたい。

さて、ここで種々の細かな問題点や特色を論じている余裕はないが、全体を通してパーリ文法学の一般的な傾向に倣い Balaṃ でも、Taddhita が重視され詳細な解説が加えられるのに対して、Saṃsāra についてはサンスクリットの場合とは異なり簡略な記述しか見られない点がまず目につく。また、語形論の上で比較言語学の立場からは異論があっても、実際の曲用の面からはむしろ合理的とも言える、Dham 語幹の母音表記とそれに基づく分類は西欧の文法書に親しんだ我々には最初とまどいを感じる。また、当然のことながら、中期インド語の一方言形としてパーリ語を捉えずに、そのみが他の言語と関連性を持たず独立して存在しているような立場で語形変化や語源を求めるために、或る場合には奇異な解釈が目立つものも存在する。それらの各事例については別に詳論することにして、最後に vutti での解説の方法に関する全体的な特徴を示しておく。

各スートラに対する解説 vutti は、六種の古典的な方法によって記述される。それらの方法の名称は以下の通りである。

一、Saṅgā 表示。表わされているものの直接的な説明。

二、Paṭibhāsa 規定内容。

三、Vidhi 音韻変化等の規則。(例えば、音の代置 adesa、新しい音の捜入 āgama、音の欠落 lopa 等)

四、Niyama 一般的に示されているものの強調。

五、Anidesa 既述のもの繰返し。

六、Adhikāra 前後のスートラの関連性。

勿論 vutti の中には、これらの要素が総て充足されていないものも多い。しかし、

Balaṃ に関する最も定評ある解説書 Paṭṭhānanda 版 (Colombo, 1934) の註釈 (シンハラ語) には、上記の六種に基づいた極めて明快な説明が施されている。その意味では、我々にとってはいささか煩瑣なこのような区分も、彼らの思考方法から導き出された合理的な分類と考えなければならぬ。

以上、紙数の都合で細部の内容分析や検討を省略したが、前述の如くいずれ批判的な校訂版確立の後に詳細な考察を試みたい。

(註記省略)

『釈浄土群疑論』における不可解なる文章の解明

村上真瑞

『釈浄土群疑論』における浄土の三界摂、不摂に関する問題について、日本において古くは、道忠の『釈浄土群疑論探要記』、宣明の『釈浄土群疑論口義』等の末書類に引用されている。近年における研究では、望月信亨博士が『中国浄土教理史』の中において、

「之を要するに西方浄土は、仏の所変についていへば無漏他受用の浄土であり、凡夫自心の所変についていへば有漏の土で、即ち欲色二界の摂とせなければならぬ」として、凡夫所変の浄土は三界の摂であるという説をとられている。また神子上惠龍博士は、『弥陀身土思想の展開』の中で『釈浄土群疑論』の大意を和訳しながら、最終的に、

「第一釈は有漏の浄土はこれ欲色二界の摂とする。即ち有漏心は三界を離れぬものなれば三界の摂といふべきである。三界の中、彼の浄土は欲色二界の摂である。(中略) 第二釈は、有漏所変の浄土なりとは云へ、三界の摂と為すことは出来ないとする。何者、有漏の名は寛く、三界の名は狭い、經に浄土に生ずれば五趣無しと云つてゐる。故に有漏とは名くべきも、三界の摂と云ふことは出来ないといふのである。此の如く二釈ある中、初釈を以て正としてゐる」

として、凡夫所変の浄土は三界摂の説を正しいとされている。これら三界摂の説の論拠は次の問答の中に表れている。すなわち『釈浄土群疑論』巻第一によると、

「問。若不許是欲色界攝、者何因。无量壽經言、三乃至淨居天等。答。此是施設、為天不可下、即為三、實天、一分欲色界上、也。若実天、者如来淨心所變、豈是欲色界攝。又言、若